

東海道から世界へ

家康は亡くなる前の約

10年間、駿府で過ごしまし

た。その期間にオランダ、ス

ペイン、イギリスの大使が、

外国から「皇帝」と呼ばれ

るほどの権力を持つ家康の

元を訪れ、たくさんの贈り

物をしました。有名な品の

つが静岡市駿河区の久能

山東照宮博物館にある「洋

時計」です。

1611年、スペイン国

王はセバスチャン・ビスカイ

ノに日本へ行くよう命令し

ました。1609年に千葉

県沖で沈没したスペイン船

の生存者を、家康が手厚く

世話したことへのお礼をす

るためです。ビスカイノは

江戸で将軍秀忠に会った

後、東海道を通って家康に

会いに行き、洋時計を贈り

ました。各国の大使から

の贈り物の中には眼鏡も

ありました。当時の日本

で作られていなかったと

され、「目器」と呼ばれ、

家康が愛用しました。

同じ時期に家康は、豊

臣秀吉が朝鮮を攻めた

ためになくなった朝鮮と

の国交を回復させたいと

考え、1607年に江戸

で秀忠との話し合いを実

現させました。後に「朝

鮮通信使」といわれる朝

鮮の使節は船で大坂(現

在の大坂)まで行き、東

海道を通って駿府や江戸

へ向かいました。家康の

外国との交流は自らが整

備を始めた東海道などの

道があつてこそ花開いた

のです。

重要文化財「洋時計」と「目器」
(久能山東照宮博物館蔵)